慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『和歌初学抄』伝本考
Sub Title	
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.409- 435
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0409

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『和歌初学抄』伝本考

川上新一郎

藤原清輔撰『和歌初学抄』は同じ清輔の『袋草紙』『奥義抄』にくらべて注目されることが少ないが、詠歌の手引書といった性格を持っており、その点では『能因歌枕』と『八雲御抄』をつなぐ位置にあるともいえ、見逃すことのできないものである。

従来、『和歌初学抄』の伝本にふれたものとしては、久曾神昇氏『日本歌学大系』第弐巻解題（昭15刊、新版昭31刊）、同氏（天理図書館）善本叢書『平安時代歌論集』解題（昭52刊）、川瀬一馬氏『古辞書の研究』（昭30刊）があり、それらによって諸本分類の見通しがつけられているが、何分にも『和歌初学抄』は諸本の異同がはなはだしいこともあって、十分解明されたとはいい難いようである。

本稿においても、両氏の論に幾何もつけ加えることができず、系統の解明も不十分なのであるが、両氏の検討されなかった伝本数本を披見しえたので、それらをも含めて、今まで管見に入った諸本の整理を試みたいと思う。

まず諸本の分類を示すと次のようになる。

Ⅰ類本

a (イ)天理図書館蔵伝藤原為家筆本、同蔵伝二条為氏筆本（天理図書館善本叢書影印本底本）、中央大学図書館蔵伝藤原為家筆本

(ロ)国会図書館蔵本、彰考館蔵本

b 彰考館蔵金森本、書陵部蔵待需抄本

c (イ)書陵部蔵谷森本、書陵部蔵梶井宮本

(ロ)松平文庫蔵本、祐徳稲荷神社蔵本

Ⅱ類本

a 書陵部蔵伝藤原為家筆臨模本（日本歌学大系底本）

b (イ)鶴見大学蔵本

(ロ)寛文二年版本、祐徳稲荷神社蔵一本

諸本は、「秀句」と「物名」の項において、各標目の下に列

挙される語句が少なく整然としているⅠ類本と、語句が多く雑然としているⅡ類本とに大別される（Ⅰ類本である天理図書館善本叢書影印本とⅡ類本である日本歌学大系本とを比較すれば、その異同の大きさがわかる）。

そして、Ⅰ類本は、書写年時の格段に古いa(イ)が中心で、それとはかなり異なる本文を持つのがbである。a(ロ)はa(イ)を底本としてbを対校したものである。c(イ)(ロ)ともに誤写が多いこともあって系統を確定し難い伝本を一括したもので、将来の解明を俟つべき点が多いが、いわゆる混態本かと思われる伝本である。

Ⅱ類本はaが中心で、b(イ)(ロ)となるに従って、順次末流化したものと考えられる。

以上がごく大雑把に捉えた諸本の分類である。以下、諸本の書誌を記述し、次いで異同を検討することとする。

Ⅰ類本

a(イ)

天理図書館蔵（九一一、二―イ一五三）本　一帖

〔鎌倉後期〕写・伝藤原為家筆

斐紙綴葉装。唐草文様縹色綴子表紙（二五・〇×一五・五糎）、左肩草花模様極彩画金切箔散題簽「和謌初学抄」。見返、草花模様極彩画金切箔散。墨付、一四一丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約二一・〇糎。毎半葉八行書。一オは白紙で、左肩に打曇の短冊を貼付し「為家卿」とし「琴山」の印がある。一ウは目録で、二オに内題「和謌初学抄」とし、序につづいて本文に入る。奥書は一四一ウに、

文永五年菊月日書写之、／以付属大夫為相卿者也

桑門融覚（花押）

（読点・返点稿者。以下同じ）

とある（但、本文と別筆補写、後述）。印記は内題下に「宝玲文庫」の墨印がある。また、黒塗りの箱に収められ、表に金字で「和謌初学抄　為家卿筆／外題／冷泉為綱卿」とある。和歌の出典、歌枕の国名注記を有する。

また、本書は既に川瀬一馬氏『古辞書の研究』、中村忠行氏「為家と『和歌初学抄』」（天理図書館善本叢書『平安時代歌論集』月報）が指摘されたように、別筆補写と思われる部分があり、その部分は本文の系統を異にすると考えられるが、その点は後述する。

天理図書館蔵（九一一、二―イ一五五）本　一帖

〔鎌倉末期〕写・伝二条為氏筆

原本未見。『天理図書館稀書目録』第三（昭35刊）及び天理図書館善本叢書の久曾神氏の解題を参照して、書誌を摘記する。

斐紙綴葉装。玉取獅子織文薄緑表紙（二二・〇×一四・五糎）、左肩金砂散丹絹題簽「和哥初学抄」。見返、金銀砂横雲模様。墨付、一四七丁、遊紙、前一丁、後四丁。巻末近く、一三六丁の次及び一四二丁の次に一丁ずつ落丁がある。毎半葉八行書。墨付一ウに目録、二オに内題「和謌初学抄」とあり、序につづいて本文に入る。奥書は、一四五オに、

嘉応元年七月日依二殿下仰一抄二出之一

右大臣在二御判一

清輔朝臣依二摂政命一所二抄出一也、即彼／朝臣自筆本也、此事於二和哥之道一／尤為二要須一、深秘二窓中一莫レ出二閫外一、努(ママ)(花押)／〻〳〵

本云

以二清輔朝臣自筆本一終二書功一遂二／校点一早、又万葉哥等不審詞／者勘二彼集一令レ散レ蒙而已

建長七年八月三日

朝議大夫源朝臣在判

又云

正嘉元年五月十九日重以二正本一校合早

とある。

これらの奥書については、既に久曾神氏によって検討が加えられており、嘉応元年（一一六九）奥書中の「殿下」は藤原基房、次の奥書の「右大臣」は藤原兼実（但、末尾下部の花押は何人のものか不明）、建長七年（一二五五）奥書の「朝議大夫源朝臣」は源親行と推定されている。これらは、以下のⅠ類本にもしばしば見られるものである。

また、本書は二重箱に入り、それぞれの表に「和歌初学抄為氏卿筆一冊」「和歌初学抄　為氏卿筆」とある他、古筆了音の極札に「二条家為氏卿筆　表題妙法院堯延御筆」とあるという。和歌の出典、歌枕の国名注記はない。

本書は二丁分の落丁があり、筆者も二条為氏とは必ずしも認め難いが、伝為家筆本よりやや書写年代が下るものの鎌倉期の書写本とされ（川瀬・久曾神両氏説）、しかも伝為家筆本のような作為がなく、最有力の伝本である。

中央大学図書館蔵（K九一一、一〇四—F六八）本

文永元年（一二六四）写カ・伝藤原為家筆　一帖

原本未見。国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム及び『弘文荘待賈古書目』17、35（昭24・4、昭35・3）によって記述する。

斐紙綴葉装。牡丹唐草文様綴子表紙（二四・五×一五・六糎）、左肩題簽「和哥初学抄」。見返、金銀泥雲形模様。墨付、一〇四丁。毎半葉九行書。一オは白紙で、一ウに目録を書き、二オに内題「和哥初学抄」とし、序につづいて本文に入る。途中、六九丁と七〇丁の間に落丁があり、「物名」貝の項「いそかひ」より、「所名」江の末尾までを欠いている。約三〇丁の落丁で、おそらく、二折分の脱落であろう。奥書は、九八オに、

嘉応元年七月　日依二殿下仰一抄二出之一

右大臣在二御判一

九八ウに、

御本記云

清輔朝臣依二摂政命一所二抄出一也、即彼朝臣／自筆本也、此書於二和哥之道一尤為二要須一、／深秘二窓中一莫レ出二閫外一、努力〻〻

九九オに、

書本云

件自筆本後法性寺禅閤相二伝八条左／相府一、〻〻〻相二伝予一、其後星霜／雖レ送二数十年一、稟承纔及二両三代一、而依二／懇望異レ他許二与俊瑜一令レ写レ点也、／当道之規模末代之証本者／欤矣

安祥寺也
前権僧正在判

一〇〇オに、

文永元年六月廿七日写二正本一以レ本／書写了、尤可二秘蔵一也

交合畢

以下、用紙が変わり、別筆（南北朝ごろのものという）で、一〇一オに「和歌集／夏」として、『詞花和歌集』巻二夏の巻頭二首を書き、更に一〇二オに「春かすみたつたの山にはつはなを／忍より、夏はつま恋する神なひのほ／とゝきす、秋はかせにちるかつらきの／もみち、冬はしろたえのふし／のたかねにゆきつもるとしのくれ／まて、みな是おりにつけたるなさけ／なるへし」、一〇二ウに、「なつのよはまたよひ／なからあけぬるを／雲のいつくに月／やとる覧」とする。

最後に一〇三ウより一〇四オにかけて、

斯書者清輔朝臣所レ作也、／歌道之入徳門也、仍名二初学抄一、／然而為家卿為レ令二後学人／覚レ之、伝二写彼遺一焉、作者之／意与二筆者之情一、見者」可二并按一矣、尤可レ備二吟／床下一耳

寛永五年初春日

亜槐藤（花押）

と、烏丸光広の識語がある。

奥書中「後法性寺禅閤」は藤原兼実、「八条左相府」は兼実男良輔、「安祥寺前権僧正」は良輔子良瑜と思われる。俊瑜は未詳である。印記は、一オに「残花書屋」「岡田真／之蔵書」とあり、戸川浜男、岡田真氏旧蔵本である。また、黒塗りの箱に収められ、箱の表に「和謌初学抄為家卿真筆一冊」と金蒔絵でしるされているという。和歌の出典、歌枕の国名注記を有する。

本書の筆跡は、天理本伝為家筆本とも、書陵部本伝為家筆臨模本とも異なっており、久曾神氏が早く指摘されたように、為家筆とすることはためらわれまた大きな落丁もあるが、天理の二古写本と極めて近い本文を有し（伝為家筆本により近い）、書写年代の古さからも有力な伝本である。

a(ロ)

国立国会図書館蔵（一九五―八七）本

一冊

正保五年写

薄葉紙袋綴。元表紙はなく、「帝国図書館蔵」の文字を浮き出させた茶色厚紙表紙（二四・一×一八・三糎）、左肩題簽「和謌初学抄　完」。墨付、一五二丁、遊紙なし。字面高さ、約一九・〇糎。毎半葉八行書。一ウに目録があり、二オに「和謌初学抄」と内題し、序につづいて本文に入る。奥書は、一四九オに、

嘉応元年七月日依二摂政命一所二抄出一也、即彼／朝臣自筆本也、此

右大臣在二御判一

清輔朝臣依二摂政命一所二抄出一也、即彼／朝臣自筆本也、此

一五〇オに、

事(書)於二和哥之道一／尤為二要須一、深秘二窓中一莫レ出二閫外一、努
／〳〵
一五一オに、
本云
以二清輔朝臣自筆本一終二事功一(書)遂二／校点一早、又万葉哥等不
審詞者／勘二彼集一令レ散レ蒙而已
建長七年八月三日　　朝議大夫源朝臣在判
又云
正嘉元年五月十九日重以二正本一校合早
次いで、一五一ウに、
又云(イニ云)
応安五年八月三日書二写之一
以二(同)数多本一令二校合書写一訖、猶以代レ集哥前／後等繁多
也、以二閑日一可二直付一哉、先書留并加二／一校一了
応永卅三年五月日　　前上総介判
一五二オに、
文明二年六月中旬之比依二(同)女房之所望一／頓卒終二書写之功一
了、不審事等雖レ多レ之／如レ本写留了、閑以二証本一可二改直一
者也
権大納言判
同ウに、
右写本以二古筆(マヽ)一終レ書レ之一校早、／其後以二伏見殿　親王之
御真翰本一令二／校合一異本ト脱ニ書レ之落字同書入訖
正保五暦　正月中八終
とある。久曾神氏によれば、「前上総介」は今川範政であり、「権大納言」は三条公敦ではないかという。正保五年の書写かと思われるが、やや下る印象もある。しかし、いずれにしろ、江戸前期の書写本である。印記は、巻頭に「榊原家蔵」の墨印があり、榊原芳野旧蔵本である。和歌の出典、歌枕の国名注記を有する他、全巻に詳細な校合が施されている。(1)
彰考館蔵（巳一九—〇七五四七）本　　一冊
〔江戸前期〕写
楮紙袋綴。香色表紙（二六・〇×一九・〇糎）、左肩題簽「花月抄　和歌初学抄也」。墨付、一二丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約一八・八糎。毎半葉一〇行書。一ウに目録があり、二オに内題「和哥初学抄」とし、序につづいて本文に入る。奥書は、正保五年のものを欠く他は、国会図書館蔵本と全く同一で、わずかに国会図書館蔵本の二個所の「事(書)」が単に「書」となっているのと、文明二年奥書冒頭の「同」の字がない点のみが異なる。本文も、校合注記・書入れを含めて極めて相近い関係にあるが、直接の転写関係はなさそうである。書写年代は、国会図書館蔵本よりやや下る印象もあるが、あまり差はない。
b
彰考館蔵（巳二〇—〇七五六五）本　　一帖
〔室町末近世初〕写
斐楮交漉紙綴葉装。淡紅色表紙（二二・四×一六・二糎）、左肩金銀砂散題簽「和哥初学抄　金森本(朱)」。墨付、七九丁、遊

紙、後三丁。字面高さ、約一九・五糎。毎半葉一二行書。一オに内題「和歌初学抄」とし、序文の後に目録がある。奥書は七七オより七八オにかけて、既述のⅠ類本a(ロ)二本と同一のものがある（正保五年奥書はない）が、字句に小異がある。国会図書館本との校異を示すと次の通り。カッコ内が本書である。

此事於和哥之道（此書於和哥道）、本云（なし）、終事功遂校点早（終書功遂校合了）、朝議大夫（諫議大夫）、以正本校合早（以面本校合了）、イ二云 又云（又云）、同 以数多本（同」なし）、文明二年（同」なし）

更に七九オ右下に「後柏原院以二震（ママ）筆一書二写之一／校合了」とある。和歌の出典、歌枕の国名注記を有する。

宮内庁書陵部蔵待需抄（二六六―四）本

〔江戸中期〕写

石井（平）行豊編『待需抄』（元禄一二年成、首目一冊本文一六冊）第十冊の内。

楮紙袋綴。香色表紙（二七・〇×一九・五糎）、左打付書「待需抄　十」。墨付、五六丁、内第二四～四六丁が『清輔初学抄』の抄出。目録には、「一、古歌詞清輔初学抄ノ内　一、万葉集所名同　一、両所を詠哥同」とあるが、「古歌詞」「諷詞」「似物」「必次詞」「喩来物」「万葉集所名」「両所を詠哥」の項を抄出。抄出された項の内部では省略はほとんどない。字面高さ、約二二・八糎。毎半葉一四行書。奥書なし。朱合点あり。和歌の出典はあるが、歌枕の国名注記はない。印記は「廳司城南／館図書印」の朱印がある。

本書は抄出本であるが、『和歌初学抄』の過半の抄出で、本文は彰考館蔵金森本と同系統と認められる。ただし、相互に若干語句の出入りがあり、本書は金森本の下位伝本ではない。

c(イ)

宮内庁書陵部蔵（谷―一九〇）本　一冊

〔江戸中期〕写

斐楮交漉紙袋綴。木目文様茶色表紙（二七・〇×一九・四糎）、左肩打付書「和歌初学抄清輔」。墨付、七九丁、遊紙なし。字面高さ、約二三・〇糎。毎半葉一一行書。一ウに内題「和歌初学抄」とし、目録に続いて、序及び本文に入る。奥書は七七ウより七八ウにかけてあり、途中まで伝為氏筆本の項に掲げたものと同一であるが、字句の異同もあるので全文を示す。七七ウに、

本

嘉応元年七月日依二殿下仰一抄二出之一　右大臣　在二御判一

清輔朝臣依二摂政命一所二抄出一也、即彼朝臣／之自筆本也、此書於二和歌之道一尤為二要須一／深秘二窓中一莫二囲（ママ）外一、努々七八オに、

本

以二清輔朝臣自筆本一終二書功一遂二校点一了、／又万葉哥等不審詞勘二彼集一令レ散レ蒙而已　諫議大夫源朝臣在判

建長七年八月三日

写本

文明九年三月十五日以二右奥書已下両／三本一令二書写一訖、

猶不審事等在レ之

按察使藤原　親長

于レ時明応三年九月二十七日遂二書功一早

右此本者為二　禁裏御本一之　僧（写本きれてみえず）在二御判一

七八ウ中央に、

同第八暦以二右御本一遂二書功一早

とあり、七九オに六条藤家の系図（房前より季経まで）がある。建長七年の源親行の奥書まではI類本諸本にしばしば見られるものとほぼ同じで、文明九年の甘露寺親長のもの以下が本書独自のものである。歌枕の国名注記はあるが、「両所詠哥」を除く証歌の出典注記を欠いている。また所々に朱の合点がある。谷森善臣旧蔵本。

なお、本書には祖本の錯簡にもとづくと思われる記事の前後がある。つまり「古歌詞　万葉集」中、巻九途中の「白妙の袖ひつまてに」の次に、巻十途中の「しきたへの枕（マヽ）にうきていねらす」が続き、巻十一途中の「さゝ波やふるきみやこ」まで続いて、巻九の「白妙の袖ひつまてに」の次の「わか身そ千たひしにかへらまし」へ戻り、巻十途中「しきたへの枕にうきていねらす」の前の「衣手にやまおろしふきてきよを（マヽ）」まで続き、巻十一途中の「さゝ波やふるきみやこ」の次の「おく山の岩かけ」へと続いている。分量から考えて、ある丁の表と裏を逆の順に写したような状態である。また全体に誤りが多い。

宮内庁書陵部蔵（一五二―三八五）本

〔江戸前期〕写　一冊

楮紙袋綴。朱色改装表紙（二六・一×一九・〇糎）、左肩子持枠題簽「和歌初学抄」。近時、料紙の上下を裁ち、裏打修補されている。墨付、一七丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約二五・二糎。毎半葉一二行書。本書は抄本であり、一オに「和歌初学抄万葉集除之」とあり、序につづいて本文に入るが、「ふるき哥のこと葉」のうち『万葉集』を省略し、『古今集』より始まり、以下省略はなく、「秀句」の弓の項までを書写し、一四ウで突然『和歌初学抄』を書きさしたまま終り、次に、「新式哥」として連歌新式の歌を一七オまで記す。第一首目を示すと「発句にはしそかやぬれよとむる也むより外にはきるゝ事なし」とある。また一七ウに貼紙し、「春三月柳桜に藤の花鶯雉子雲雀たつなり」以下四首の和歌を書く。奥書はなく、印記は巻頭及び巻末貼紙に「加持井御文庫」の朱印がある。「秀句」の項の証歌の出典注記はない。

本書は省略がある上、書きさし本であるので、その全貌はつかみにくいが、全体として書陵部蔵谷森本と同一系統と認められる。字句の上ではかなり異同があるが、それは両本ともに本文に誤脱が多いためらしく、語句の配列についてはかなりよく特徴が一致する。

c（ロ）

島原公民館松平文庫蔵（一一七―二一）本

〔江戸前期〕写　一冊

原本未見。慶應義塾大学付属研究所斯道文庫所蔵のマイクロ

フィルムと書誌カードによる。

楮紙袋綴。縹色行成表紙（二七・二×二〇・〇糎）、左肩題簽「和歌初学鈔　全」。墨付、七二丁。字面高さ、約二一・六糎。毎半葉一〇行書。一オに内題「和謌初学鈔」とし、目録に続いて、序及び本文に入る。六三ウで『和謌初学鈔』本文が終り、続いて、奥書、

嘉応元年七月依二殿下仰一抄二出之一云々
建暦三年十月一日書レ之畢　清輔朝臣撰レ之也
件本以二正本一治承四年書写云々　大蔵卿有家本也
同二日以二松殿本一合点校合之　清輔朝臣自筆也
件本正本也

がある。以下続いて、「恋しさはおなし心をあらすとも今宵の月を君みさらめや」（『拾遺集』巻十三、七八七）以下、和歌、連歌、及び連歌の心得等が七二オまで雑然と書かれている。『肥前島原松平文庫目録』（昭36刊）に「付連歌師雑記」とあるのは、この巻末部分をさしている。印記は、七二ウに「尚舎源忠房」（陽刻）「文庫」（陰刻）の印がある。

さて、本書には祖本の錯簡によると思われる順序の前後がある。すなわち、「古謌詞」の冒頭に「万葉集」と標目するが、巻十二途中の「いしふみならし」から始まり、以下巻十四の「つままつのき」まで続き、それから巻頭の「すきかえ」に戻り、巻十二途中の「ひとりか君か山路こゆらん」まで続き、「つままつのき」の次に当る「つまなしの木」へつながっている。おそらく、途中にあるべき一丁分が、冒頭近くへ出てしまったのであろう。

また、本書は、「古謌詞」の項で、語句を全く切れ目なしに、あたかも一つの文章のように書き、また「物の名」の項では、他の諸本のように標目が変わるごとに改行せず、そのまま続け書きし、更に標目下の語句は小字双行に書くなど、独特の書き方をしている。また、歌枕の国名注記はあるが、「両所謌」を除く証歌の出典注記を欠いている。

本書は前記の記事の前後を初め、誤りが甚しく、管見諸本中最も不良の本文を有するが、その書写態度は決して粗雑ではないので、それ以前の段階で誤写、錯簡がおきていたものと思われる。

祐徳稲荷神社中川文庫蔵（一三三）本　一冊

〔元文元年〕写

楮紙袋綴。縹色卍繋空押表紙（二六・五×二〇・〇糎）を更に厚手の楮紙で覆い、左肩に「和歌初学抄」と打付書。墨付、七三丁、遊紙、前二丁、後一丁。字面高さ、約二一・八糎。毎半葉一〇行書。本文は松平文庫蔵本と字詰まで一致し、同一の奥書、雑記の後、七三ウに、

此本者初学之至宝奈利、甚／是文房之珍器、可レ秘々々
丙辰孟春十有日　　鹿陽侯散位／直郷（花押）

とある。直郷は鹿島鍋島家藩主鍋島直郷、丙辰は元文元年（一七三六）である。丙辰の奥書は直郷の自署と考えられるが、本文は同筆か否か判別し難い。しかし、自筆でなくともいずれ右

筆の手になるものであろう。印記は一オに「直郷／之印」の朱印がある。

本書は松平文庫蔵本の臨模に近い転写本と考えられる。

Ⅱ類本

a

宮内庁書陵部蔵（五〇一―七八）本　一帖

〔江戸前期〕写

斐紙綴葉装。打曇表紙（二三・〇×一六・五糎）、左肩打付書「和謌初学抄」（霊元天皇宸筆と伝えられる）。墨付、一四三丁、遊紙、前一丁。字面高さ、約一九・〇糎。毎半葉六～九行書。一オに「和謌初学抄」として目録を記し、一ウに再び内題「和謌初学抄」として、序につづいて本文に入る。尾題「初学抄　清輔朝臣撰」。奥書は、一四二ウから一四三オにかけて散らし書きされ、

弘長二年六月／求出更校合、／年来証本／被二借失一了、／仍以二或本一／所二書写一也

六旬余比丘／融覚／（花押似書）

とある。和歌の出典、歌枕の国名注記がある。

本書について、久曾神、川瀬両氏とも為家筆本の臨写本とされている。確かに、花押は為家のものの模写と認められ、また、本文は他の全ての諸本と異なり、平仮名の他に片仮名も用いられているが、その片仮名にしばしば古体が混り、底本が古写本であったことをうかがわせる。ただし、字体は小ぶりで、いわゆる為家風の書体とは異なるようであり、果して真蹟の為家筆本から直接臨写したものかどうか疑問が残る。しかし、奥書の記載内容そのものには、別に疑うべき点はない。

なおⅠ類本a(イ)の伝為家筆本にある文永五年の奥書は別筆補写であり、後述するように疑わしいものであるので、本書の奥書と比較して、為家所持の『和歌初学抄』の性格を考察する材料にするのは危険である。

本書はⅡ類本中、誤写の少ない善本である。(2)

b(イ)

鶴見大学図書館蔵本　一帖

〔江戸中期〕写

斐紙綴葉装。紺地金泥山水文様表紙（二三・五×一六・六糎）、左肩金泥草花文様題簽「和哥初学抄」。見返、布目金紙に墨山水画。墨付、九〇丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約一五・五糎。毎半葉一〇行書。一オに内題「和歌初学抄」とし、目録を記し、一ウ白紙の後、二オに「古歌詞」として本文に入る。序を欠く。序がないのは抄本である書陵部蔵待需抄本を除けば本書のみである。尾題「初学抄　清輔朝臣撰」。奥書なし。また、歌枕の国名注記はあるが、「両所ヶ詠歌」を除く和歌の出典注記はない。

本書は次に掲げる寛文二年版本にかなり近い本文を有するが、版本の転写本ではなく、Ⅱ類本aと版本とをつなぐ位置にある。本文はやや誤りが多い。

b(ロ)

宮内庁書陵部蔵（鷹―四一九）本

寛文二年刊　〔京〕村上勘兵衛　　五冊

楮紙袋綴。紺色表紙（二七・〇×一八・四糎）、左肩打曇子持枠題簽「清輔初学抄　一（一五）」。墨付、第一冊より順に、三〇丁、二一丁、三一丁、二五丁、九丁、計一一六丁。無辺無界、九行。柱刻なし。印面高さ、約一九・〇糎。第一冊一オに「和歌初学抄目録」とし、一ウまで目録とし、二オに内題「和歌初学抄巻一」とし、序を記し、二ウは白紙で、三オより本文に入る。本書は五巻五冊に分かたれており、巻一、古歌詞、巻二、由緒詞、秀句、諷詞、似物、必次詞、巻三、喩来物、物名、巻四、所名、万葉集所名、読習所名、巻五、両所詠歌とする。この五巻の巻立は、おそらく本来のものではなく、開板に際しての分冊の都合で設けられたものであろう。尾題「和歌初学抄終　清輔朝臣撰」。刊記は第五冊終丁ウ末尾に、

寛文二壬寅春日　村上勘兵衛開板

とある。歌枕の国名注記はあるが、「両所詠歌」以外の項の和歌の出典注記はない。本文はかなり悪い。(3)

祐徳稲荷神社中川文庫蔵（一二九）本

〔江戸中期〕写　　一冊

楮紙袋綴。茶色表紙（二六・五×一九・八糎）、左肩題簽「和歌初学鈔　全　清輔朝臣〔撰〕」。墨付、一一四丁、遊紙なし。字面高さ、約一九・六糎。毎半葉九行書。目録はなく、一オに内題「和歌初学鈔」と序を記し、二オより本文に入る。尾題「和歌初学鈔　清輔朝臣撰」。奥書なし。印記、一オに「中川／文庫」他の朱印がある。歌枕の国名注記はあるが、「両所詠歌」以外の項の和歌の出典注記はない。

本書は、寛文二年版本の忠実な転写本と思われる。本文も同一であり、また、版本に見られる五巻の巻立は行なわれていないが、よく見ると、巻二、三、四、五の内題があるべき「由緒詞」「喩来物」「所名」「両所詠歌」の冒頭に、内題を削除したと覚しい切取りがあることからも、版本の転写本として間違いないであろう。

次に諸本の異同について考察することにするが、その異同は複雑であり、要約して示すことは困難である。目につく特徴を一、二あげれば、Ⅰ類本は「嘉応元年七月日依二殿下仰一抄二出之一」の奥書を持ち（例外は、奥書部分が別筆補写である天理図書館蔵伝為家筆本、抄出本である書陵部蔵待需抄本、書きさし本である書陵部蔵梶井宮本の三本）、一方Ⅱ類本は「初学抄　清輔朝臣撰」（書陵部蔵伝為家筆臨模本による、諸本字句の異同あり）の尾題を持つなどの点がある。しかし、異同の中心は、「秀句」と「物名」の項において各標目の下に列挙される語句の順序と数である。一般的に、Ⅰ類本では語句の数が少なく、Ⅱ類本ではその数が多くなっている。さらに、各類の諸本間においても複雑な異同がある。そこで、まず、「秀句」より三つの標目を選んで、各系統本でどのような違いがあるかを例示してみることにする。なお、標目そのものにも出入りがあり、「秀句」が「天　日　月」と始まるのがⅠ類本であり、「天　月　日」と始まるのがⅡ類本であり、区別する場合の目安である。

露

Ⅰ類本a(イ)（天理図書館蔵伝為氏筆本）

露

たま　ひかり　をく　むすふ　したゝる／こほる　すかる　かゝる　ぬる

つねよりもおきうかりけるあか月は／つゆさへかゝるものにそありける。(4)

Ⅰ類本a(ロ)（国会図書館蔵本）

露　玉　光　置　結

たま　ひかり　をく　むすふ　したゝる／こほる　すかる　かゝる　ぬる　消　こき

後撰ナシ　くイ

つねよりもおきうかりけるあか月は／つゆさへかゝるものにそありける

Ⅰ類本b（彰考館蔵金森本）

露

玉　光　置　こほる　結ふ　消　ぬく／したゝる　すかる　かゝる　こる

後撰ナシ

常よりもおきうかりけるあかつきは／つゆさへかゝる物にそありける

Ⅰ類本c(イ)（書陵部蔵谷森本）

露　たま　ひかり　をく　むすふ　したゝる　こほる／きゆ　すかる　かゝる　ぬるゝ

たのめおくことの葉たにもなきものを何にかゝれる露の命そ

Ⅰ類本c(ロ)（松平文庫蔵本）

露　玉　ひかり　おく　むすふ　下たる　こほる／すかる　かゝる　ぬるゝ

たのめおく言の葉たにもなき物をなにゝかゝ／れる露のいのちそ

Ⅱ類本a（書陵部蔵伝為家筆臨模本）

露（ツユ）　タマ　ヒカリ　シタヽル　コホル　カヽル　オキイル／ヲク　ムスフ　ツユフス　スカル　ヌル　キユ　コル

たのめをくことのはたにもなき物をなにゝかゝれるつゆのいのちそ

Ⅱ類本b(イ)（鶴見大学蔵本）

露　玉　光　したゝる　こほる　かゝる　おきゐる　をくむすふ／すかる　ゐる　きえて　こる　露ふす

たのめをくことのはたにもなき物を何にかゝれる露の命そ

Ⅱ類本b(ロ)（寛文二年版本）

露　玉　ひかり　したゝる　こほる　かゝる　おきゐる　をく　むすふ　とくる／ゐる　きえて　こる　露ふす

たのめをくことのはたにもなき物を何にかゝれる露の命そ

馬

Ⅰ類本a(イ)

馬

のる　ひく　はやる　はす　のかふ／くら　うつし　あるはふる　くさ

Ⅰ類本a(ロ)
馬　はしる　のる(乗)　ひく(引)　はやる　はす(馳)　のかふ(野飼)／くら(鞍)　うつし　ある　はなる　くさ(草)

Ⅰ類本b
馬　乗　引　馳　鞍　うつし　草　はしる／はやる　野飼　はなる　ある

Ⅰ類本c(イ)
馬　のる　ひく　はやる　はす　のかふ　くら　うつしあな／はなる　くさはしる

Ⅰ類本c(ロ)
馬　のる　引　はやる　はすのかふ(ママ)　くら　うつし／あり　はなる　くさ　はしる

Ⅱ類本a
馬　ノル　ヒク　ハヤル　ハス　ノカヒ　ノカフ　クラ　アル／ウツシ　クサ　ハナル　ハシル　ハム　アサル　ミマク　サ　シツクラ／クツワ　マユトシメ　タツ　アフミ　ミマキ

Ⅱ類本b(イ)
馬　のる　引　はやる　はす　野かひ　くら／野かふ　ある　うつし　くさ　はなり　はしる／はむ　あさる　たつ　みまくさ　しつくら　くり／まゆはしめ　あしなみ　あふみ　みまき

Ⅱ類本b(ロ)
馬　のる　引　はやる　はす　野かひ　くら／野にかふ　ある　うつし　くさ　はなり　はしめ／はむ　あさる　たつ　みまくさ　しつくら　くり／さゆ　はしら　あしなみ　あふみ　みまき

鷹

Ⅰ類本a(イ)
鷹　しらふ　ましろ　やかたを　とかへる／やまかへり　たかへる　あはす　かり／こゐ(木居)　とたち　のもりのかゝみ(鏡)／すゝ(鈴)　のきはうつ　そる(めるイ)／をく　とりかふ　をきゐ

Ⅰ類本a(ロ)
鷹　しらふ　ましろ　やかたを(屋形尾)　とかへる／やまかへり　たかへる　あはす　かり／こゐ(木居)　とたち　のもりのかゝみ(鏡)／すゝ(鈴)　のきはうつ　そる／をく　とりかふ　をきゐ

Ⅰ類本b
鷹　しらふ　ましろ　屋形尾　とかへる　山かへり／手かへる　あはす　かり　木居　とたち／野もりの鏡　鈴　のきはうつ　める　をく／とりかふ　をきゐ

Ⅰ類本c(イ)
鷹　とかへる　とやかへる　やまかへる　たかへる　あはす

かり　こゐ　とたりすゝ／のもりの鏡　のきはうつ　そる
をく　とりかふ　をきえ

Ⅰ類本c(ロ)

鷹　とかへる　とやかへる　山かへり　かたかへり　あはす／
かり　こゐす　とたち　野守の鏡　のきそ(ママ)うつ／そる　お
く　取かふ　おきゑ

Ⅱ類本a

鷹(タカ)　トカヘル　トヤカヘル　ヤマカヘリ　タカヘル　アハス／
カル　カリ　コヰ　トタチ　ノモノ(リ)カヽミ／スヽ　ノキハ
ヲツ　トリカフ　オキエ　エフクロ／ヲク　ヨトル　ソル
スフ　ツカレ　アシヲ／ツカレヤル　キヽス　イヌ　モ
トヲリ　ソラトル　ヲフサ／クサトル　トツチ　シラスリ
ノスヽ　シハ　ヘ

Ⅱ類本b(イ)

鷹　とかへる　とやかへる　山かへり　たかへる　あはす／
かり　とたち　野もりのかゝみ　すゝ／のきはうつ　と
りかふ　をきゑ　ゑふくろ　をく／よとる　そる　すふ
つかれ　あしを／へを　つかれやる　きゝす　いぬ
もとをり／はしたか　ならしは　空とる　おふさ　草と
る／とつな　しらすりのすゝ／しは

Ⅱ類本b(ロ)

鷹　とかへる　とやかへり　山かへり　たかへり　をく／か
り　とたち　野守の鏡　空とる　あしを／のきはうつ
とりかふ　をきゑ　のすゝ　もとをり／よとる　すふ
つかれ　しは　おふさ／へを　きゝす　いぬ　あはす
草とる／はしたか　そる　ならしは　すゝ／とつな　つ
かれやる　しらすり　ゑふくろ

以下、各系統別にその本文の性格と問題点を考察する。

Ⅰ類本a(イ)

この系統本の三本の中、書写年代がやや下ると思われる伝為氏筆本で例示した理由は、天理本伝為家筆本には別筆補写の部分があるからであるが、その部分の性格については、既に川瀬(5)・中村(6)両氏に説がある。まず、川瀬氏は、

本書は厚様斐紙に両面書きの綴葉装であるが、臨模の部分は、一葉を表裏二枚にはがし、楮紙様の別紙に認めて、原紙と巧に張合せ、一見補入か否か判らない様に作為してある。今その臨模の分を検するに、墨附第十二葉（表裏）・十三（同）、第六十二・三葉、七十六・七葉、百二十六・三十一・三十二・三十三・三十四・三十五・三十六・四十一葉（終葉）の合計十四葉で、（中略）これ等の作為は恐らく手鑑か何かに張る為に切截した後を補充したものででもあらう。原本を臨模してある事は疑ふ余地がないから、原本が存在する間に臨模してゐるものであつて、損傷等の為、失つた部分を後に補ひ加へたといふが如き事情ではないと思ふ。その補筆は江戸時代（初至中期か）であろう。

とされ、原本切取の際の臨模と考えられ、但し、文永五年の奥書については、

文永の奥書は、他の物語・歌集等の一種に記るされてあつた

為相附与の為家の識語を臨模して、和歌初学抄に添附したものではあるまいか。即ち、初学抄には文永五年為相附与の事実はなかつたものと推定せられる。

として、Ⅱ類本aに見られる弘長二年の為家奥書との食い違いを理由に、文永五年の奥書は『和歌初学抄』とは無関係とされた。

一方、中村氏は、

別筆の部分は紙質を異にし、奥書を記す一紙も亦同様であるので、後人の悪質な所業かと疑われもするが、これは正本との校合によって紙面を汚すのを避け書改めたものらし（い。）とされた。中村氏の説の真意はややつかみ難いが、一旦書写した後に別本（正本）と校合したところ、大きな異同があったので、異同の大きな部分のみ書写し直してさし換えたという御考えであろうか。中村氏がそのように考えられたのは、後述するように、本書の補写部分の本文が特異であることを考慮されたためと思われるが、それにしても不自然な想定といわなければならない。奥書までが別筆であるという一事を考えても、賛同しかねる説である。

また、自然に思える川瀬氏の説にも疑問がある。川瀬氏が原本の臨模と考えられたように、別筆部分の筆蹟は、本来の部分と酷似している。ところが、本文を検討してみると、別筆部分は本来の部分と明らかに本文の系統を異にしているのである。天理本伝為家筆本と伝為氏筆本は、歌枕の国名注記や和歌の出典注記の有無に違いがあるものの、本文は一見直接の転写関係があるかと疑われる程酷似しているが（実際は直接の関係はないであろう）、別筆部分になるとその相似関係がにわかに崩れてしまうのである。例えば、天理本伝為家筆本の一二、一三丁の別筆部分は、「古謌詞万葉集」の巻十四途中「いそのくさね」より巻末補遺中の「やまちまとひてこの日くらしつ」に至る部分であり、中村氏も引用されているが、この個所の語句の配列が、伝為氏筆本・中央大学本を含め他の諸伝本がほぼ一致しているのに対し、天理本伝為家筆本のみが全く異っている。しかも、後述するように原典との比較によっても、他の諸本の配列が妥当で、天理本伝為家筆本の配列は疑問が多いことがわかる。

更に、天理本伝為家筆本は「両所を詠哥」の後半も別筆部分であるが、この個所の和歌には、独自異文が多く、その中には、「河」の項の

まかねふくきひの中山おひを更（ママ）／ほかた（ママ）にかはのおとのさやけさ（『古今集』巻二十、一〇八二）（一三三オ）

や、

よろつ世をみかさ（ママ）の山のいら（ママ）へには／やすかはの水わひ（ママ）にあひにける（『拾遺集』巻十、六〇三）（一三三ウ）

のような著しい誤りを含んでいる。

以上の点を考えると、天理本伝為家筆本の別筆部分は本来の書写部分とは本文の性質を異にしていると考えるべきであり、手鑑等に切り取る際、臨模して補ったとは考え難い。しかし、補写部分と同系統の本文を持つ伝本が管見に入らない現在、補

写がどのような事情でなされたかは不明とする他はない。あるいは、川瀬氏が疑いを抱かれ、他の物語・歌書等の奥書を付加したものかとされた文永五年の為家奥書は、補写に用いられた伝本のものである可能性もあるかと思われる。

ともかく、天理本伝為家筆本の補写部分は、本来の書写部分と同列には扱えないので、本系統本は、伝為氏筆本によって例示したのである。

なお、伝為氏筆本は二丁分の落丁があるが、それに該当する天理本伝為家筆本の個所は大部分別筆補写部分であるので、それにより補うのは危険で、中央大学蔵伝為家筆本で補うのが正しい。

Ⅰ類本a(ロ)

例示した個所を比較すれば明らかなように、本系統本は、Ⅰ類本a(イ)（それも伝為氏筆本の方により近い）を底本にし、Ⅰ類本bを対校したものである。校合は全巻にわたっており、かなり丁寧、詳細である。その場合の校合方針は大体次のようなものと認められる。

1、本文の異同、語句の出入は注記するが、語句の配列の相違は注記しない。

2、本文の異同は、漢字と仮名の相違にまで及び、漢字書きの多い校合本により、右傍に振漢字を行なう他、字句の異同は「〇〇イ」等として注記する。

3、語句の出入は、校合本にない語句は「イニ無」とし、逆に校合本のみにある語句は、〇印を付して適当な場所に書き入れる。この場合まとめて書くことが多い。

本系統本が1のように、語句の配列の相違を無視する校合方針をとった理由は、Ⅰ類本a(イ)とⅠ類本bは、本文の異同や語句の出入（この場合、Ⅰ類本bの方が概して語句が多い）も勿論あるが、語句の配列の異同が多く、かつ複雑で、これを注記で示すことが困難だったためと思われる。

また、例示した「秀句」の標目のうち、「露」「馬」を見るとわかるように、Ⅰ類本bにのみある語句を、〇印なしに書き入れることもしばしばあり、この場合、底本本文と校合本文の相違が一見わからなくなってしまっている。その他、書き入れる場所は、標目の末尾の場合(「露」)と標目のすぐ下の場合（「馬」）とがあり、両方併用の場合もある。

なお、校合に使用されたⅠ類本bは、漢字と仮名の区別の校合を見てもわかるように、金森本に極めて近い伝本であったと考えられる（金森本そのものの可能性もあろう）。また、国会図書館蔵本の正保五年奥書に見える「伏見殿　親王之御真翰本」をそれと考えることもできそうであるが、この場合は、彰考館蔵本にその奥書がないことが障害となるので、断定することはできない。

Ⅰ類本b

本系統本をⅠ類本a（a(ロ)がa(イ)とbの合成本であることが判明したのでa(イ)を単にaと表示する）と比較すると次のようなことがわかる。それは、例示を見てもわかるように、各標目下の語句の出入は比較的少ないにもかかわらず、配列が著しく

異ることがしばしばあり（「馬」が代表的）、しかもその配列は、諸系統本を見渡しても全く独自のものであることである。また、その配列の異同にしばしば法則らしきものがある。

Ⅰ類本aを中心にしてⅠ類本bを見ると、後者は前者の語句を前から順に少しずつとばしながら跳び跳びに拾い、次いでとばした語句を最後にまとめて置くような形になっている。

逆に、Ⅰ類本bを中心にしてⅠ類本aを見ると、後者は前者の各標目の末尾の方にある語句を前の方の語句と語句との間に、ある時はまとめて、ある時は単独に挿入したような形になっている。

例示の三例の中では、以上にあてはまるのは「馬」のみであるが、実際は他にもかなり存在する。

また、これと同じような現象は「古哥詞」の「後拾遺詞」の個所にもかなり大規模に認められる。他系統の全ての諸本がほぼ『後拾遺集』の歌順と一致する語句の配列を有するのに対し、Ⅰ類本bは国歌大観番号で示すと次のような配列になっている。

7	9
9	10
……（中略、番号順）	173
340	360
371	612
481	635
649	651
652	662
692	706
904	

906	1021
1038	1052
1053	175
204	……（中略、番号順）
349	383
381	388
399	418
530	530
559	559
567	

573	615
615	616
621	640
681	685
703	709
707	728
729	751
770	771
821	839
848	876
939	963
1122	1166

この場合も、他系統本を中心に考えると、本系統本は、途中抄出しながら終りまで行き、取り残した語句を後へ補ったような形であり、逆に、本系統本を中心に考えると、他系統本は本系統本の末尾の語句（175以下）を番号順になるように、前の部分に振り分けて挿入した形となっている。

この相違の原因は不明としか言いようがなく、[7]「古哥詞」の中「後拾遺詞」のみこうなっている理由は更に理解し難い。

但し、後述するように、本系統本は末端の字句に転訛改竄の跡が見られるので、全体としてⅠ類本aより価値の低い系統本と考えられる。

しかしながら、既述のごとく、配列に関しては原因不明の特異な異同を有するので、Ⅰ類本の中ではa系統本と対立する系統として、更に検討が必要である。

Ⅰ類本c(イ)(ロ)

この系統本には書陵部蔵谷森本、同蔵梶井宮本、松平文庫蔵本、祐徳稲荷神社蔵本の四本を分類したが、祐徳稲荷神社蔵本が松平文庫蔵本の転写本と考えられ、全く同一本文である他は、三本まちまちな性格を示していて、極めて特徴がつかみにくい伝本群である。

しかし、これらを一括する基準は、例示した「露」の項の証歌が、通常はⅠ類本は「つねよりも」、Ⅱ類本は「たのめをく」と分かれているにもかかわらず、Ⅰ類本cは、他の諸点から見て、明らかにⅠ類本であるにもかかわらず、Ⅱ類本と同じ「たのめをく」となっている点である。

また、本系統本は、概してⅠ類本aに近い本文を有することが多いが、Ⅰ類本bと一致する場合もしばしばあり、時としてⅡ類本に類似することもある。例示した「露」の証歌や、「鷹」

の項は、Ⅱ類本に近い本文を示す比較的珍しい例である。

なおⅠ類本c(ロ)は、「物の名」の個所の標目の順序に、独自の異同を有するという特徴がある他、既述のように甚しく本文状態が悪く、錯雑した個所が多い。

本系統本は、その性格を見究めることは相当困難であるが、全体に本文状態が悪いこと、また他の諸系統本と散発的に類似すること等を考えると、その性格には『和歌初学抄』の撰述過程に起因するものより伝流過程に起因するものが多いのではないかと考えられる。その点、書陵部蔵梶井宮本、松平文庫蔵本(勿論祐徳稲荷神社蔵本も)に連歌にかかわる雑記が付されていることは暗示的である。つまり、中世においては、『和歌初学抄』が連歌の付合集に類するものとして用いられたのではないかということである。もしそうであるとすると、そのような場合、原本に忠実な書写というより、実用のための省略や付加が行われやすいことは想像に難くない。あるいは、本系統本が他系統本に対しても、また本系統本相互においても、本文が不安定である理由はその辺りにあるのかもしれない。

Ⅱ類本a、b(イ)(ロ)

Ⅱ類本内部での異同はそれ程複雑ではない。Ⅱ類本bは基本的にはⅡ類本aの末流本と考えてよいであろう。しかもその順序はa——→b(イ)——→b(ロ)と考えられる。

もっとも、Ⅱ類本諸本間の異同が全て末流化現象のみとは断定できず、例示の中では、b(ロ)が「鷹」の項で独自に特異な異同を示すような場合もある。しかし、それらはごく稀であり、Ⅱ類本bに独自の価値を認める必要はないと思われる。

そこで、Ⅱ類本について考察するには、Ⅱ類本aをもって代表させるのみで十分であろう。

さてⅠ類本及びⅡ類本それぞれの中での異同については以上の如くであるが、ついで、Ⅰ類本とⅡ類本の異同について考えてみることとする。この点については、既に川瀬・久曾神両氏に見解がある。川瀬氏は、

> 標出の語が少いのは、或は文永本(稿者注、Ⅰ類本)の脱落もあるかもしれないが、語序の異同を見るに、文永本の配列の方が分類が整つてをり、弘長本(稿者注、Ⅱ類本)は錯乱してゐるものと思はれる。

とされ、「秀句」の標目の順等からⅡ類本に混乱があることを指摘され、断定はされないが、Ⅰ類本に増補と錯乱が加ってⅡ類本になったとお考えのようである。

一方、久曾神氏は、乙類本(稿者注、Ⅰ類本)の嘉応元年奥書に見られる「抄出」の語を手がかりに、甲類本(稿者注、Ⅱ類本)を嘉応元年に抄出して乙類本が成立したとされている。

単純に考えれば、語句の少ないⅠ類本を増補してⅡ類本になったか、語句の多いⅡ類本を抄出してⅠ類本になったかのいずれかということになるが、事実はそれほど簡単ではない。

Ⅰ類本とⅡ類本のうち、伝来の正しいⅠ類本aとⅡ類本aについて、例示した「秀句」の三項を比較すると、「露」「馬」の項はほぼ最初の方は一致し、Ⅱ類本aは後半に独自の語句が多いことがわかる。これに対し「鷹」の項は最初の語句から異っ

ており、Ⅰ類本aの最初の部分はⅡ類本aでは途中にあらわれる。全体としていえば、大抵は前者のような異同であり、後者のような異同は稀である。それにしても、順序の異同もあって、Ⅰ類本a——→Ⅱ類本aとか、Ⅱ類本a——→Ⅰ類本a（もっと大まかに、Ⅰ類本——→Ⅱ類本もしくはⅡ類本——→Ⅰ類本）といった単純な変化であるかどうかすら疑わしく、性急な推定は危険である。

そこで、諸系統本の本文の性格を探るため、見方を変え、次のような比較を試みる。

『和歌初学抄』冒頭の「古謌詞」の項は、諸本の異同が比較的少ない個所であるが、『万葉集』『古今集』から『後拾遺抄』までの勅撰集、及び『伊勢語』『大和語』の和歌から重要な歌句を抄出したものであり、原則として原典の順に抜き出しているため、原典と字句を対照させることが可能である。

そこで、『和歌初学抄』と原典との比較を試みると、まず注目されるのは、『万葉集』『拾遺集』として抜き出す際に用いられた原典の性格である。『万葉集』として用いられているのは、通常の『万葉集』ではなく、橘敦隆編の類題集『類聚古集』であり、天理本・中央大学本の二種の伝為家筆本をはじめ多くの伝本に付されている一より十九に至る巻数の注記も『類聚古集』の巻数である。[8] 一方、『拾遺集』は「抄」ではなく「集」によって語句を抜き出している。これは、同じ清輔の『奥義抄』中、釈における「拾遺歌」が「抄」より抜き出されているのと異っている。

以上、いずれの場合も、『和歌初学抄』がなぜそのようなや特異な本によったのか、その理由は明らかではない。

さて、『和歌初学抄』の諸系統本の異同を原典と比較した場合、注目すべき点が存するのは『万葉集』『古今集』『後撰集』の部分である。

まず、『万葉集』について検討する。『万葉集』の項は、ほぼ『類聚古集』の順に従って語句を抄出しているが、例外的に、『和歌初学抄』諸本が共通して『類聚古集』の配列と大きく異っている場合がある。それは、次の二点である。

1、巻十九の後に、補遺と思われる語句が大量に付されている他、各巻の末尾にも補遺と思われる、その巻の前の部分の語句が並ぶことが多い。

2、巻三の七夕の項と巻六の水部の一部に『類聚古集』とかなり配列を異にする個所がある。

前者は、清輔が一旦抄出した後、とり落とした語句を落穂拾いしたものと考えられるが、一部後人の増補の可能性も考えられるであろう。後者は、『和歌初学抄』のよった『類聚古集』と現行の『類聚古集』とが、部分的に和歌の配列を異にしているのではないかという疑いを持つのであるが、これだけでは確実なことはわからない。

しかし、重要なのは『和歌初学抄』諸本間に異同がある場合である。まず配列を比較検討すると、『類聚古集』と最も配列が一致するのは、Ⅰ類本aとⅡ類本aであり、Ⅱ類本bがこれに次ぎ、Ⅰ類本bとcは相当異っている。この場合、次第に配

列が乱れていったとする考えの一方、逆に『類聚古集』との校合で後人が配列を正したとする考えもあろう。しかし、それぞれ伝来が古く、しかも系統を異にするⅠ類本aとⅡ類本aが共に最も『類聚古集』の配列に近いということは、後人により配列が正されたとする考えより、徐々に配列が乱れたとする考え方に妥当性が高いことを示していると考えるべきであろう。

次に字句の異同を検討する。諸本間に重要な異同のある語句を抜き出し、『類聚古集』と比較する。『和歌初学抄』本文（底本はⅠ類本a(イ)伝為氏筆本を用い、Ⅰ類本b彰考館蔵金森本〈略号、金、以下同じ〉、Ⅰ類本c(イ)書陵部蔵谷森本〈谷〉、Ⅱ類本a書陵部蔵伝為家筆臨模本〈書〉、Ⅱ類本b(ロ)寛文二年版本〈版〉で校合する）、『国歌大観』番号、『類聚古集』巻数及び頁数(9)、『類聚古集』本文の順に掲出する。

和歌初学抄	国歌大観番号	類聚古集頁	類聚古集
はるひもくれに（も—の金）	一九一一	一ノ一三	はるひもくれに
ちりかもくると（か—ナシ谷版）	一八四一	一ノ一九	ちりかもくると（も二合点）
いもかしらひも（ら—た金谷書版）	一四二一	一ノ三二	いもかしらひも
をかひには（かひ—きひ書、きゐ版）	八三八	一ノ四六	をかひにも
ふかくさゆり（コノ項ナシ谷、ふかくさゆり—山かけさゆる書版）	二四六七	二ノ五〇	くさふかゆり
さつきやまうのはな月よ（ま—み谷）	一九五三	二ノ一〇	さつきやまうのはなつきよ
すたれうこかし秋風そ吹（う—て版）	四八八	三ノ八	すたれうこかしあきかせそふく
あまのかは水かけくさ（かは—ナシ谷）	二〇一三	三ノ二六	あまのかはみとかけくさ
あまのかはやすのわたり（かは—ナシ版）	二〇〇〇	三ノ二一	あまのかはやすのわたり
あまのかはうきつ（つ—木金）	一五二九	三ノ一六	あまのかはうきつ
あまのかはやそのふなつ（やその—やそせの書、な—る版）	二〇四六	三ノ四一	「あまのかは」ナシ、やそのふねつ
あきのつゆしも（き—ま書版）	二二五三	三ノ八一	あきのつゆしも

たかまつのゝへのうへのくさ（つ—と金、ゝ—ナシ谷、へ—ナシ金書版）　二一九一　三ノ一五七　たかまつののゝうへのくさ

かはせとめ（せ—を谷、とめ—めと金）　四一四六　四ノ二〇　かはせめと（レ顚倒符）

あくらんわきもしらすして（わ—か書版、して—ナシ版）　二六六五　五ノ二九　あくらむわきもしらすして

かはちとりすむやさはへ（さは—河金谷）　二六八〇　五ノ八四　かはちとりすむさわのうへ

たまたすきくもゐる山（山—みね書版）　一三三五　六ノ三五　たまたすきくもゐるやま

なみちへさらひゆく水（へ—い谷、ら—そ書版）　六九九　六ノ四四　なみちへさらひゆくみつ

おちたきちなかるゝ水（た—ナシ版、ち—り金、て谷（ちイ）、て書版）　一七一四　六ノ四三　おちたきつなかるゝみつ

いはもとたきちゆく水（たきち—たきり金、たきて谷（ちイ）、たきて書（ち）、たかきり版）　二七一八　六ノ四七　いはもとたにゆくみつ（きち）

そてさへぬれてあさなつみてん（あさな—わかな書（アサナイ本）、ん—ナシ版）　九五七　六ノ一四六　そてさへぬれてあさなつみても（む）

すゝきつるあまとかみらん（コノ項ナシ版、かみ—やよ書、ら—ナシ谷）　二五二　六ノ一七一　すゝきつるあまとかみらむ

なみのしほさゐ（ゐ—き書（イイ本）、き版）　二七三一　六ノ一八三　なみのしほさゐ

そてつくはかりあさきせよ（よ—を諸本）　一三八一　六ノ九三　そてつくはかりあさきをや

おちかたのへ（のへ—ひと谷書版）　一一〇　七ノ八　をちかたのへ

しかのあまのいそにかりほすなつきもの（な—み書版）　三一七七　七ノ七八　しかのあまのいそにかりほすなつきもの

たにせはみみねへにはへるたまかつら（み—る版、へ—ナシ谷（ヘイ）、ナシ版）　三〇六七　七ノ一三八　たにせはみゝねへにはへるたまかつら

いつれのしまのあまかるらん（あま—山書版、か—く谷）　一一六七　七ノ七七　いつれのしまのあまかゝるらん

としのやとせをわかぬすまひし（ぬ—ナシ谷書版）　二八三二　七ノ二〇四　としのやとせをわかぬすまひし

みなそこのたまにましれるいそかひの（たまにましれる）　二七九六　八ノ二八　みなそこのたまにましれるいそのかゐの

いそ—玉もにすれるしほ金）

たまのをゝかたをによりて（を—いと書版）　三〇八一　八ノ八五　たまのをゝかたをによりて

しまかくれわきこきくれは（わき—我諸本）　九四四　八ノ一四九　しまかくれわかこきくれは

あさこきつゝうたふふなひと（こきつゝ—こきしつゝ金書版、こきゝつゝ谷）　四一五〇　八ノ一六八　あさこきしつゝうたふゝなひと

わかはたものゝしろあさころも（は—か金、しろ—しろき版、あさ—あま金、あさら谷）　一二九八　八ノ四九　わかはたものはしろきあさきぬ（アサコロモ（朱））（あニ合点）

ことしゆくにゐしまもりかあさころも（か—や書、ナシ版）　一二六五　八ノ三六　ことしゆくにゐしまもりのあさころも

しほひれはあしへにさはくしらつる（ひれ—みて金谷、つる—つるの版）　一〇六四　一一ノ二五　しほひれはあしへにさわくしらつる

おくやまのいはかけ（おくやまの—ほりえこく書版）　七九一　一一ノ一二八　おくやまのいはかけ

しろたへのわかしたひも（ひも—衣諸本）　三七五一　一二ノ一一一　しろたへのわかしたころも

ひとりかきみかやまちこゆらん（か—や金谷書版）　三一九三　一二ノ一三五　ひとりか君かやまちこゆらむ

たこのうらあさけのなき（うら—うみの谷書版）　一一五五　一三ノ二二　なこのうみのあさけもなき

やまへまそゆふみしかゆふ（コノ項ナシ版、ま—に谷書、み—こ金）　一五七　一四ノ一九　やまへまそゆふみしかゆふ

やらのさきもり（やら—やか谷、から書版、もり—もち谷、に版）　三八六六　一五ノ五一　やこのさきもり

むさしのゝうけらかはなのいろにつなゆめ（う—を書版、三三七六　一六ノ九九　むさしのゝうけらかはなのいろにつなゆめ

つな—いつな金谷書版）

まかねふくにふのまそほのいろにいてゝ（コノ項ナシ版、三五六〇　一六ノ一六一　まかねふくにふのまそほのいろにいてゝ
に―ら書、いろ―道金、ゝ―ナシ谷）

以上の表は異同のうち一部を抄出したものであるが、ほぼ全体の傾向はうかがいうる。

全体的に見て、底本としたⅠ類本a伝為氏筆本が最も『類聚古集』に近い本文を持っていることは確かである。中には「しまかくれわきこきくれは」（八ノ一四九）「あさこきつゝうたふふなひと」（八ノ一六八）「しろたへのわかしたひも」（一二ノ一一一）のように、伝為氏筆本のみが異っている例もあるが、他系統本が異っている例の方がはるかに多い。そのうち、Ⅰ類本b彰考館蔵金森本、Ⅰ類本c書陵部蔵谷森本、Ⅱ類本b寛文二年版本の三本は、いずれも例を挙げたものの倍以上の独自異文が存在し、本文の転訛がはっきり見てとれる。また、語句の配列ではⅠ類本aと並んで『類聚古集』との一致が見られたⅡ類本a書陵部蔵伝為家筆臨模本も、本文に関してはⅠ類本aより隔っていることが見てとれる。特に、「をきひには」（一ノ四六）「山かけさゆる」（二ノ五〇）「しかのあまのいそにかりほすみつき物」（七ノ七八）「ほりえこくいはかけ」（一一ノ一二八）のように、耳慣れない語句を意図的に改竄したと覚しき個所が目につく。

以上の点から、『万葉集』の個所においては、Ⅰ類本aが最も原典である『類聚古集』に近く、Ⅱ類本aは配列は原典に近いものの本文はやや改変の疑いがあり、その他の系統本は配列・本文ともに転訛が進んでいると認められる。

しかし、Ⅰ類本aとⅡ類本aとの比較については、Ⅰ類本aの方がかえって原典に当って字句を正したのではないかとする一抹の不安もないではない。そこで、続いて『古今集』『後撰集』でも同様の作業を試みる。

諸本の異同については『万葉集』の場合と同様に表示し、対照する原典は、『古今集』『後撰集』とも清輔本と定家本を用いる。『古今集』では、底本に永治二年清輔本（宮本本）を用い、貞応二年定家本（梅沢本）を対校する。『後撰集』では清輔本とされている片仮名本（田中本）に天福二年定家本を対校し、巻十までで打切ることとする。(10) 留意すべき個所のみ抄出するのは前と同じである。

和歌初学抄　　古今和歌集

国歌大観番号

九　このめもはるの（もはるの―はるさめ書版）

いはゝしるたき（はゝ―しは谷、はゝ書）
かせもふきあへぬ（ぬ―す金）
はみのはな（はみ―浪諸本）
まくらさためんかたしらす（しらす―もなし金）
はなかたみめならぬ人（み―ナシ谷、ぬ―ふ諸本）

和歌初学抄

かすみふきとくこのめはるかせ（く―け諸本）
はるひとくふちのうらはのうらとけて（とく―さく金谷書、さす版）
わかしめゆひし（ゆひし―し野ゝ金）
たもとほすまも（も―に書版）
あきのたのかりほのやと（やと―いほ金谷版）
あきかせのうちふくことに（ち―ら谷、ことに―からに金書版）
わかみしくれにふりぬれは（わかみ―我も書版）
さよすかた（た―ら金谷書版）
このめはるくくの（はるくく―もはる版）
やまかはのいはまほし（コノ項ナシ版、かは―水金谷）
こゝろなくさのはまちとり（く―き版）
しらなみのさはくいりえ（さはくいりえ―よする磯ま金）
たちよれはかけふむはかりちかきまに（れ―ら金書版、きまに―けれと金書版）
からにしきおしきわかなをたちはてゝ（を―は金谷書版）

五四　いはゝ(シ朱)しるたき（はゝ(シ朱)―しは定）
八三　風もふきあえぬ
二五〇　浪のはな
五一六　まくらさためんかたしらす（しらす―もなし定）
七五四　はなかたみめならふ人

後撰和歌集

国歌大観番号
六〇　カスミフキトケコノメハルカセ
一〇〇　ハルヒサクフチノウラハノウラトケテ（サク―さす定）
一八三　ワカシメユヒシ
二二二　タモトホスマモ
二九五　アキノタノカリホノヤト
三八八　アキカセノウチフクコトニ（コトニ―からに定）
四五〇　ワカミシクレニフリユケハ（ユケハ―ぬれは定）
五三〇　サヨスカタ（ラ）（ラニ合点）（タ―ら定）
五四五　コノメハル（ラ）ハルノ
五九一　ヤマカハノイハマホシ（カハ―水定）
六三六　コヽロナクサノハマチトリ
六七一　シラナミノサハクイリヘ（サハクイリヘ―よするいそま定）
六八三　タチヨレ（ラ）ハカケフムハカリチカキマニ（チカケレ）（レ―ら定、チカケレ）チカキマニ―ちかけれと定）
六八六　カラニシキヲシキワカナヲタチハテヽ（ヲ―は定）

これを見ると、『和歌初学抄』諸本の本文の異同が『古今集』『後撰集』における清輔本と定家本の字句の異同にかかわっている場合があることがわかる。

まず、Ⅰ類本b彰考館蔵金森本は、『古今集』の五一六、『後撰集』の三八八、五三〇、五九一、六七一、六八三、六八六のように清輔本と異なり、定家本と一致する本文を有する個所が目立ち、伝来途上で定家本（もしくはそれに近い本文を持つ本）と接触し、本文が改竄された疑いが強い。そして、先に述べたように『万葉集』の個所において、配列と字句に原典と異同が多いことと考えあわせると、Ⅰ類本bは、少なくとも「古詞」の部分では、かなり後人の手が加わっていると考えてよいであろう。またⅠ類本c書陵部蔵谷森本の場合は、『古今集』『後撰集』の個所では、積極的に改竄の手が加わった様子はあまり認められないものの、明らかな誤りが目につき、本文そのものが良くないことがわかる。

しかしながら、Ⅱ類本ことにⅡ類本a書陵部蔵伝為家筆臨模本の本文をどのように解釈するかは微妙である。表において、『後撰集』の三八八、五三〇、六八三、六八六の個所で片仮名本本文と異なり、定家本と一致しているものの、その五個所のうち三個所までが片仮名本の傍書の本文と一致しており、真に清輔本本文を逸脱しているかどうか疑問があり、後人の改竄と軽々に断定するわけにはいかない。更に、杉谷氏が指摘されたように、清輔晩年の校定本である承安三年（一一七三＝清輔七十歳）奥書本は、現在定家本系本文への校合という形でしか知られない悪条件を考慮に入れても、従来清輔本とされてきた片仮名本や伝慈円筆本とは本文にやや距離があるようであり、清輔自身による『後撰集』本文校定の際の本文の揺れが、『和歌初学抄』のⅠ類本aとⅡ類本aとの本文の違いに反映している可能性もあるからである。

試みに、先にあげた『後撰集』の四首五個所について承安三年奥書本に当ってみると、三八八、五三〇、六八三の三首四個所は底本の定家本のままで朱校がなく、六八六の一個所のみが片仮名本本文に一致する朱校がされている。もっとも朱校のない前者のうち、五三〇、六八三の二首三個所は、杉谷氏が、承安三年奥書本との校異が行なわれなかったと推定されている部分であるから、考慮外におくべきものと思われる。

しかし、このように考えてくると、考察の対象にできる個所数の少なさが気にかかり、決定的な事は言えそうにもない。ただ、『万葉集』の場合、Ⅱ類本aが原典である『類聚古集』から離れた本文を持っていたことを考え合わせると、この場合もⅡ類本aに疑問を抱かざるをえない。

また、様々の保留を行なった上でも、Ⅰ類本aがある種の清輔本と良く一致する本文を持つという点は疑いがないのであるから、Ⅱ類本aの本文の性質如何にかかわらず、Ⅰ類本aが信頼すべき本文を維持していることは認められるであろう。

更に、以上の作業そのものを疑う立場として、片仮名本が清輔本であるとする前提は、清輔の歌学書類に引用された『後撰集』の本文に最もよく一致するのが片仮名本であるというにす

ぎず、本稿の作業は、その作業の逆を行なったにすぎないのだから、一致して当然という見方もあろう。しかし、この場合にも、『和歌初学抄』諸本の中で、最もよく片仮名本に一致するのはⅠ類本aであるという事実は動かせない。また、Ⅰ類本にほぼ共通して見られる建長七年の源親行の奥書中に、「万葉哥等不審詞者勘二彼集一令レ散レ蒙而已」とあることから、Ⅰ類本aの原典への一致を、原典と校合したためとする見方もあろうが、『万葉集』の場合はとにかく、『後撰集』において、定家本(もしくはそれに近い本文を有する本)と一致することの多かった本文を、ある種の清輔本に近い本文に改竄するということは、考え難いであろう。

以上、論の展開が煩雑になったが、まとめてみると以下のようになる。

Ⅰ類本、Ⅱ類本ともにa系統本が純粋に近い本文を有しており、それ以外の諸本は本文転訛の跡が認められる。しかし、この場合でも、末端字句の転訛・改竄と、内容・構成の異同とは別の次元に属する可能性は依然として存在するのであるから、a系統本以外の諸本(殊にⅠ類本b、c)を棄てて顧みなくてよいというわけではない。

一方、Ⅰ類本aとⅡ類本aとの関係については決め手を欠き、確かな結論は出ない。しかし、Ⅰ類本aが信頼するに足る本文を持っていることは確かである。それに対し、Ⅱ類本aは改竄かと疑われる本文を種々有しており、その取り扱いには慎重を要することは明らかである。

従って、『和歌初学抄』諸本の中では、Ⅰ類本aを最も重視すべきで、それと大きく異なる本文を持つⅡ類本aは、異本本文として慎重に併せ用いるべきであると考える。またⅠ類本b、cはその性格を更に明らかにすべく一応留意の要があるが、Ⅰ類本a(イ)とⅠ類本bとの合成本であることが判明したⅠ類本a(ロ)と、Ⅱ類本aの末流本と推定されるⅡ類本bは、さしたる価値を有しないので、考慮の対象外としてさしつかえないであろう。

以上、諸本について比較検討を試みたが、久曾神氏が言及されて、いまだ管見に入らない伝本もあるので、更なる調査を期したい。

それにしても『和歌初学抄』諸本の異同は甚しく、このような和歌詠作の実用書的著述では、撰述の過程ばかりでなく、伝流の過程でも変容を蒙ることが大きいことを示しているように思われるのである。

〔注〕

(1) 国文学研究資料館初雁文庫蔵(一二―五八九)本は、Ⅰ類本a(ロ)系統本の巻頭と巻末を昭和初年に書写した僅か墨付一二丁のもので、国会図書館本と同じ奥書を持つ。西下経一氏が「色葉和難集の作者」(『文学』昭7・3)中で、「家蔵の初学抄(題簽には花月抄)」と言及された本よりの抄写かと思われるが、該本は初雁文庫中には現存しない。

(2) Ⅱ類本aで管見に入ったのは、この書陵部蔵伝為家筆臨

模本一本のみであるが、未見の叡山文庫蔵本は奥書から見てこの系統本かと思われる。久保田淳氏「叡山文庫蔵書目録抄略註」（「和歌史研究会会報」16昭40・2）の解説より全文引用する。

袋綴写本一冊。二五・一×一九・二cm題簽なし。「和歌初学抄全」と打ちつけ書き。墨付八〇丁、奥書（融覚の部分は歌学大系本と一致）本云

初学抄清輔朝臣撰

弘長二年六月」求出更校合」年来証本」被借失了」仍以或本所書写也」

六旬余比丘」融覚

判

山門東南　浄教房実養(?)法印

おそらく完本か。（以上引用）

また、国会図書館蔵（わ九一一、一〇七―一岡）の寛文二年版本（岡田希雄氏旧蔵本）には、全巻にわたって岡田氏によると思われる校合書入がされており、巻末に「一本／弘長二年六月求出校合、年来証本被二借失一了、仍以二或本一所二書写一也／六旬余比丘融覚御判」と書入がある。この校合本もⅡ類本aであることは、校合の内容からも明らかであるが、奥書の字句に小異があること等から、書陵部蔵本、叡山文庫蔵本のいずれでもないと思われる。

（3）注（2）の国会図書館蔵寛文二年版本は、改装し、一冊に合綴したもので、天地及び、書脳部分を裁ち落としたため、書脳部分の文字が綴じ目にはいってしまっている。書陵部蔵本と同版同刊記であるがやや後印である。

なお、久曾神氏は「天和四年子仲春上澣、青物町、伊勢屋板」と刊記のある、半紙半截絵入一冊本の存在を報告されているが未見である。

（4）「露」は伝本によって証歌が異なるので、特に証歌まで掲げる。

（5）『古辞書の研究』（昭30刊）二七八～二八五頁。

（6）天理図書館善本叢書『平安時代歌論集』（昭52刊）月報。

（7）恣な想像の幾つかを挙げれば、次のような場合が考えられる。

1、Ⅰ類本a（もしくはそれに近い本）から、その略本を作ろうとして、所々省略して写してみたが、結局気が変って省略した語句を後に追補した。

2、所々略された抄本をⅠ類本a（もしくはそれに近い本）と対校して、足りない語句を後に追補した。

3、所々に追補の語句のあるⅠ類本bを基にして、追補の語句を本体部分の語句の間に適宜挿入してⅠ類本aができた。

1と2なら、Ⅰ類本bはⅠ類本aの末流本であり、3ならⅠ類本bはⅠ類本aの前稿本ということになるが、いずれも決め手は全くない。また3は、「後拾遺詞」の場合は可能性があるが、「秀句」の場合は、各標目末尾の語句を前

の方に移す理由が理解し難く、極めて不自然である。

(8)「二十」の注記を有する伝本もあるが、『和歌初学抄』は『類聚古集』巻二十(現存本は欠巻であるが旋頭歌の巻とされる)からは語句をとっていないと思われる。

(9)『類聚古集』は、臨川書店複刻版(昭49刊)を用い、頁数も複刻に際し付されたものによる。

(10)『後撰集』の清輔本がいかなる本文を有するかは、かなり複雑で、杉谷寿郎氏『後撰和歌集諸本の研究』(昭46刊)において、詳細な検討がなされている。杉谷氏は、藤原清輔校定本として、加納諸平旧蔵片仮名本、伝慈円筆本、承安三年奥書本の三種をあげられているが、それら三本間には本文の異同もかなりあり、又、傍書本文もある。杉谷氏は傍書校合も清輔もしくはその周辺の人の手になるものと推定されているが、それらは、清輔自身の校定本文の揺れをあるいは反映しているかに思え、その辺を見究めるのはかなり困難のようである。

〔付記〕本調査に際し、御所蔵の図書の閲覧・複写を許された諸文庫・機関に深く感謝の意を表する。なお、本稿の一部は、和歌文学会昭和五十七年度六月例会(六月十九日、於上智大学)において口頭発表したものによっている。